

日本ハンドボールリーグ観戦者におけるハンドボールのイメージに関する研究 ～日本ハンドボールリーグ観戦者調査を通して～

Study on the Image of Handball Held by Spectators of JHL

1K05B200

指導教員

主査 原田宗彦先生

藤井 祥史

副査 木村和彦先生

1. 序論

「中東の笛」や「オリンピックやり直し予選」を契機に、ハンドボールは社会的に注目を浴びた。ハンドボール競技に対する人々の認知度は急激に上昇し、メディアへの露出機会は増加している。トッププレイヤーの宮大輔(大崎電気)を中心とした取り組みの成果もあり、ハンドボールに対する世論が変化しており、日本ハンドボールリーグの1試合あたりの平均観戦者数も昨年度との比較では(2008年12月8日現在)前年比約129.7%(男子)112.9%(女子)となっている。しかし、これまで実際に日本において、ハンドボールの認知度や顧客に関しての調査はほとんど見られない。よって本研究では急速な認知度の拡大を見せたハンドボールを、JHL 観戦者に焦点を当て、顧客層、観戦動機の分析、ハンドボールおよび JHL のイメージを明らかにすること、また「中東の笛」や「オリンピックやり直し予選」を契機にハンドボールのイメージの変化を明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法

本調査は、日本ハンドボールリーグ機構、大崎電気ハンドボール部との協力により、第 33 回日本ハンドボールリーグの観戦者を対象として、訪問留置法自記式調査で行った。調査員は早稲田大学スポーツ科学研究科大学院生とスポーツ科学部大学生に調査協力を依頼した。調査用紙は無記名、選択と記述の複合方式で行った。

調査項目を4つの大きな枠組みで分けて作成し、1 つ目が年齢、会場へのアクセス方法、所要

時間、同伴者の有無といった観戦者の定量的なデータによって人口統計学的特性及び行動的特性を明らかにする項目で、2 つ目が JHL の観戦者を初観戦者とそれ以上の観戦者に分けて観戦動機を明らかにする項目である。3 つ目が JHL の情報入手経路、観戦者が必要に感じているサービス、再観戦意図といった、JHL の観戦者の動向を調査する項目である。4 つ目が「中東の笛」や「オリンピックやり直し予選」がきっかけでハンドボールに対するイメージの変化があったかどうかを明らかにする項目である。5 段階評価でポジティブな変化かネガティブな変化があったかを明らかにし、変化したと感じたイメージの内容を収集した。

<調査概要>

- ・日時 2008年10月18日(土)・11月29日(土)
計2日間
- ・場所 市川市塩浜市民体育館(千葉県市川市)・和光市総合体育館(埼玉県和光市)
- ・回収数/総観戦者数 330部/2417部

3. 研究の結果と考察

ハンドボールの認知度の拡大が明らかになったと言える。これまでは所感でしかなかったが、イメージ変化の回収によって、確実に認知度の拡大が起きていることが分かった。また、観戦者層が従来のハンドボール経験者や男性が多かった傾向から、ハンドボール未経験者、女性の割合が多い傾向へシフトしている。このことから JHL が新たな顧客層に対してアプローチすることに成功

したといえる。

しかしこの顧客獲得の要因は決して「北京オリンピック予選」や「中東の笛」などの一連の事件のためハンドボールそのものの人気や認知度が拡大したのではなく、この件をきっかけに、ハンドボールが潜在的に抱えていた選手やチームが露出して、認知度が拡大したことが原因である。今後 JHL および JHA は認知度が拡大し、多様化する観戦者層のニーズを満たすための努力がより一層必要になるだろう。

4. 今後への提言

日本ハンドボールは確実に進歩を見せ観戦者層の拡大、認知度の増加を見せた。しかし日本の中で、ハンドボールはまだ決して社会に対して影響力の大きい存在ではない。今後は一過性のブームで満足することなく、強化・人気両面での発展が日本ハンドボールに課せられた使命である。